

日本インターナショナル建築会と近代建築の国際的同時性——1930 年代日本における建築思想受容の一断面——

ミース・ファン・デル・ローヘ
ブルーノ・タウト
ヴァイセンホーフ CIAM
ジードルング

終身会員 ○田 中 辰 明*

1. はじめに

20 年代末から 1930 年代初頭にかけて、日本の建築界では、様式史的整理や技術主義的合理性に依拠した従来の建築理解を越え、建築を社会的・思想的実践として再定義しようとする動向が顕在化した。この転換は、単なる造形上の近代化ではなく、建築家の職能、社会的責任、さらには生活様式そのものの再編と連動する知的運動であった。その中心的役割を担った団体の一つが、日本インターナショナル建築会である。本稿は、同会の活動および機関誌『インターナショナル建築』を軸に、当時の日本建築界がドイツおよびフランスを中心とする近代建築運動をいかに受容し、再解釈したのかを検討するものである。特に、ブルーノ・タウト来日の思想的背景を国際的ネットワークの形成過程の中に位置づけ、日本近代建築史における本会の歴史的意義を明らかにすることを目的とする。

2. 日本インターナショナル建築会の成立と理念

日本インターナショナル建築会は 1920 年代後半、上野伊三郎を中心に本野精吾、伊藤正文ら関西の若手建築家によって結成された。彼らは建築を国民様式の表現や伝統意匠の継承としてではなく、工業化社会における生活組織の再編に関与する社会的行為と捉えていた。ここで重要なのは、海外の造形を紹介する趣味的態度ではなく、ヨーロッパ近代建築運動の思想的背景——すなわち社会改革、合理主義、機能主義——を含めて理解しようとした点である。

同会は外国人建築家を名誉会員に迎え、グロピウス、ベーレンス、タウトらと接点を持った。これは日本建築を国際的視野から再評価する視座を内部化する試みであり、建築を国境を越えた同時代的課題への応答とみなす立場の制度的表現であった。

3. 機関誌『インターナショナル建築』の思想的役割

1929 年から 1933 年に刊行された『インターナショナル建築』は、同会の思想的中枢を担う媒体であった。当時の建築雑誌が施工技術や官庁建築紹介を主としたのに対し、本誌は理論、社会思想、生活改善を主要テーマとした点で特異である。誌面ではバウハウス、新即物主義建築、CIAM の理念などが体系的に紹介され、建築は社会変革の媒体として論じられた。また、日本建築の再評価も重要な論点であった。桂離宮、数寄屋、民家は装飾排除、構成の明晰性、空間の合理性といった観点から再解釈され、日本建築が近代建築理念と内的親和性を持つ可能性が示された。この視点は後のタウトの日本建築論と深く共鳴する。



図-1, バウハウス、ホルンハウス、ヴァイマール

4. ドイツおよびフランスにおけるインターナショナル建築

同会が参照した「インターナショナル建築」は、ドイツとフランスで異なる展開を示した。ドイツでは住宅不足と社会再建の要請のもと、標準化・合理化・集合住宅建設が重視され、建築は集团的・匿名的性格を帯びた。これに対しフランスでは、ル・コルビュジエに代表される理論的宣言が主導し、機能主義と造形の純度が結びついた。CIAM を通じ両者は連動し、超国家的運動として自己組織化された。文献 1 によると建築家 Ludwig Hilberseimer

はインターナショナル建築について次のように述べている。(以下著者訳)

「新しい建築芸術の前提条件および基礎は、きわめて多様である。建物の性格目的は、それぞれの使用要求によって規定される。材料と構造は、その構成を成り立たせる物質的手段である。これに加えて、製作技術や運営管理、経済的・社会的諸要因もまた、きわめて大きな影響を及ぼす。しかしそれらすべての上位にあって支配的なのは、建築家の創造的意志である。この意志が、個々の要素が占める割合を定め、並存する諸要素から建築作品としての統一体を形成するのである。

造形の過程のあり方が、新しい建築芸術の性格を決定する。それは外面的な装飾性を目的とするものではなく、すべての要素を精神的に貫徹した表現である。したがって美的要素は、建築の有機的構成を無視するファサード建築におけるように、上位に置かれた自己目的なものではなく、他のすべての要素と同様に全体の中に位置づけられる。そしてこの全体との関連においてはじめて、その価値と意味を獲得する。

いずれか一つの要素が他に優越すると、必ず混乱を引き起こす。ゆえに新しい建築芸術が目指すのは、すべての要素の均衡、すなわち調和である。しかしそれは外面的で図式的な調和ではなく、課題ごとに新たに獲得される調和である。そこには様式的図式は存在せず、造形する意志の支配のもとで、すべての要素が相互に浸透し合うことの、その都度の表現があるのみである。したがって新しい建築芸術の根底にあるのは様式の問題ではなく、建築の問題である。

このことから、国際的な新しい建築芸術において外観形式が驚くほど一致している理由も理解される。それはしばしば考えられているような流行的な形態の問題ではなく、新しい建築的精神態度の根源的な表現なのである。確かに、地域的・民族的特性や造形者個人によって多様化はしているが、全体としては同一の前提条件から生み出された産物である。そこからその外観の統一性が生じ、国境を越えた精神的連帯が成立するのである。」

5. ヴァイセンホーフジードルングの歴史的意義

1927年のヴァイセンホーフジードルングは、近代建築理念が実体化された最初期の総合的実験である。ミースの監督下に各国の建築家が参加し、平屋根、白色壁面、水平連続窓などの共通言語を提示した。鉄骨・鉄筋コンク

お茶の水女子大学名誉教授



図-2 ヴァイセンホーフジードルング

リート構造、標準化部材の採用は工業社会に対応する合理主義を明示し、造形実験と社会的住宅問題への応答が統合された点に歴史的転換性がある。

6. ブルーノ・タウト来日の思想的背景

1933年、ナチス政権成立後に来日したタウトの受容は偶発的ではない。『インターナショナル建築』を通じ彼の思想は既に紹介され、日本側には合理性と倫理性の観点から建築を評価する枠組みが存在していた。したがって彼の桂離宮評価は、異文化的驚異ではなく、知的共鳴として受容された。

7. おわりに

日本インターナショナル建築会の意義は、造形様式の導入ではなく、建築を社会的・倫理的実践として再定義した点にある。同会は日本建築を国際的同時性の中に位置づける視座を確立し、その思想的到達点としてタウト来日が位置づけられる。本会の活動は、戦後建築思想へ連なる重要な前史として再評価されるべきである。

今日、世界的規模でポピュリズムの動向が顕在化しているのに対し、1920年代には第一次世界大戦の惨禍を踏まえ、国境を超えた普遍的価値としての「インターナショナル」が思想的に共有されていた。

参考文献

1. Julius Hoffmann Stuttgart, Internationale neue Baukunst
2. Justus Bender, なぜ AfD は支持されるのか
田中辰明訳、同時代社

Ochanomizu University